
ポケットモンスター 星の冒険記

カシスオレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター 星の冒険記

【Nコード】

N1466X

【作者名】

カシスオレンジ

【あらすじ】

ある夜、突然北極星が消えた。それと同時に、あるポケモンが村を襲う。そして、その日から世界中で異変が生じるようになった。星達は、異変に立ち向かう。

これは「ポケモン 星の大冒険」のリメイク版です。話はほぼ変わっているのですが、前作は読まなくてOKです。

第0話 北極星の消滅（前書き）

前作のリメイク版です。前作を読む必要はありません。

第0話 北極星の消滅

風が、心地よかった。屋根の上で横になった一匹のルカリオは、夜空を見上げ、瞬く数々の星を眺めていた。ルカリオの名は星と言った。物心がついた頃には母が他界し、5歳の頃には父が兄を連れて行方を晦ましていた。

孤独なんて、生温い言葉だった。

元々、彼に友達と言える者は、殆ど皆無と行って良かった。ただ、環境は決して恵まれていなかったが、彼の性格は明るかった。それのお陰で、彼には仲間ができた。

「……見えないな」

北の空を見ていた星は、動かない星――北極星がどこにも見当たらなかったことに気づいた。幼い頃、父に初めて教えてもらった星である北極星の消滅に気づかない彼ではない。

「霞んで訳じゃないよな……だとすると……」

その途端、静まり返った村で突如、爆発音が聞こえた。耳を劈くような轟音。星は驚き、音が聞こえた方を見た。

多くの家が燃え盛り、砕け散っていた。

「な、何だ……?」

「星、降りる!」

星の後ろから、一匹のレントラーが叫んだ。星は訳が分からず、慌てて飛び降りる。途端、大爆発が起こり、星の家は吹っ飛んだ。

「助かったぜ、ソラ」

「今、村がメンドクサイことになってる。気をつける」

「え?」

ソラと呼ばれたレントラーがそう言った瞬間、村の中央にある祭壇が、大爆発する。

「行くぞソラ!」

「メンドクサーけどそうするしかないな!」

300m余りしかない距離を二人は全速力で走る。村のポケモン達は皆逃げたようで、爆発のせいもあって村全体が非常に殺風景になっていた。

「派手に…やられたな」

「ああ…おい星、アレを見る」

祭壇は炎を立てて、激しく燃えていた。それでも祭壇は辛うじて崩壊していなかった。その祭壇の上には、一匹のポケモンがいた。

無表情の、フードを被ったポケモンが手に青の石を持っていた。

「こんな所にあつたか……」

「誰だテメエ！」

星の声を無視し、ポケモンは祭壇を飛び降り、村の出口に向けて歩き出す。

「おい、待てよ！」

「煩いハエだな」

フードを被ったポケモンは振り向き、目を青く光らせる。すると、星は一気に後ろに吹っ飛び、ソラが慌てて受け止める。

「お前……その石は……」

「貴様らには関係な……ほう……」

途中で声をきったフードを被ったポケモンは、突如消えた。そして辺りに、暗い声が響く。

『貴様らはいずれ、私と戦うことになるだろう。特に、そのルカリ才は私を倒せる唯一の存在となるはずだ。それまで、腕を上げておくと良い。我が名は……』

“ミュウツー”だ』

ソラと星は圧倒的なその威圧感に、ただ立ち尽くすのみだった。追うことなど、出来るはずがなかった。ミュウツーと名乗ったそのポケモンの気配が完全に消えても、動くことも、話すこともできなかった。

「なあ……ソラ……あいつは……何なんだ……？」

「俺が知ってる訳ないだろ……」

「おい、お前ら！何やってる早く避難しろ！」

棒のように立ち尽くし、恐怖のあまりロクに声もでない二人を、後ろから大人のポケモン達が呼ぶ。二人は頷いて、走っていった。

星はもう一度、北の夜空を見る。

北極星は、やはりなかった。

第一話 旅立ち（前書き）

長らくお待たせしました割りには短いですが、何かの前触れとでも思ってくださいw

第一話 旅立ち

臨時の避難場所の洞穴での寝心地は最低だった。身体中痛く、首も痛い。星は外に出て、よく晴れた心地良い空を眺め、そしてすぐに表情を曇らせる。昨日、村の全てが破壊された。

「起きたのか」

ハスキーボイスを聞き、星は後ろを振り返る。一匹のバシャーモが濡れタオルを首に巻き、乾いたタオルで汗を拭っている。

「朝トレか、レン?」

「いや、村の残骸を少し片付けていた。何も変わらなかつたけどな」

レンは話しながら苦笑いする。このレンは星の大親友で、星、ソラ、レンの3人でよくつるんでいた。

「そっか……」

「まあ、仕方がない。誰がやったかは知らないが、幸い死者もいなかったしな」

「不幸中の幸いってとこだな」

「ああ」

その時、老いたライチュウが手を振って走って来た。汗がかき、非常に焦っている。

「どうしました？」

「レンか、た、大変じゃ、 “星玉の青石” がなくなってしまったのじゃー！」

ライチュウの話によれば、その石は青い石らしい。幾度も戦争や紛争が起こったこの世界で、村が一度も巻き込まれなかったのはその石が加護があったからと伝えられている。

「なあ、それって村の真ん中であつた祭壇の……？」

「ああ、そうじゃが……まさか星お前、知ってるのか!？」

「いや確証は……」

「いやそれだよ、星」

星の言葉を遮り、後ろからソラの声がする。顔は寝ぼけ気味で、声色もはつきりしなかった。

「ミュウツーとか言うヤツはアレを狙ってたらしい」

「そうなのか……」

ライチュウは唇を噛み、村を一回りしてくると言い、去って行った。星は石の上に座り、溜め息をつく。

「どうすんだらうな……」

「あの石……宝玉と言った方が正しいだろうが、何であのミュウツ
ーはアレを……」

「何らかの目的があるだろう」

三人の中に沈黙が訪れる。果たして、あの男は何を企んでいるの
か。そしてどう実行に移すのか……。

そして星は一つの案にたどり着く。

「なあ、村を出ないか？」

「「はあ？」」

声が綺麗にハモる。おかげにこの二人、声が似ているので区別が
つかない。

「だからさ、追っんだよ。あいつを」

「そんな無茶な……ソラ、どう思う？」

「いや……悪くないかもな。こんな廃墟だらけの村にいるよりかは
マシだ」

ソラは頷き、星はしてやったりとドヤ顔である。レンは溜め息を
つく。

「若いヤツはいいな……」

「お前同い年だろ」

ジジ臭いレンに、ソラが苦笑する。意見は一致したようだ。

「じゃあ、明日な」

「そりゃまたお早いこった」

文句を言いつつも、レンは特に反対はしないようだった。

翌日、肩に鞆をかけ、三人は村の出口に立つ。何もかもがなくなつた村に、三人は黙禱を捧げた。

必ず、帰ってくると、心の中に誓って。

だが、この時、彼らは予想しなかった。三人が揃ってこの場に揃い合わせることはもうないことを。

北極星の消失が、全てを物語る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1466x/>

ポケットモンスター 星の冒険記

2011年11月4日19時15分発行